

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

親密であるということは、かつては近接性の高い相手との触れ合い、有り体に言えば他人には見せられないような部分まで見る／見られることではぐくまれるものだった。それは同時に、そこで得られる関係が、人々のアイデンティティを形作っていたということでもある。だが人々は、次第にそうした「見る／見られる」関係を強制されることを疎んじることがようになってきた。その結果、地域や家族から離れて単身生活をして、その代わりに公的機関による監視を受けられるようになったというのが、ノック^(注1)の「プライバシーのコスト」論だ。

日本社会の歴史で言うならばこれは、「居住実態把握」の問題として考えることができるかもしれない。かつて「イエ」^(注2)という制度が社会の基盤にあった時代には、誰がどこに住んでいるかを確認するために「戸籍」を用いることが可能だった。戸籍は家長の下にどんな人が居住しているか、そしてそうした人びとの血縁、姻戚関係はどのようなものであるかを把握するための資料でもあったが、あるイエに住まう人々の記録でもあったのだ。

しかしながら産業化が進み、特に若い人々への都市への大幅な移動が始まる一九五〇年代から六〇年代にかけて住民票の作成が進み、社会保障や選挙権などは住民基本台帳で、出生・死亡・相続などの情報は戸籍で、という二重の管理体制が敷かれるようになった。さらに近年では、住民票の移動手続きを経ない世帯の増加にもない、警察が地域のマンションなどを戸別訪問して、住民の居住実態を把握するということも行われている。

このことじたいは、年金記録の問題や社会保障の不正受給などと関わる、統一された国民の身分保証システムの不在、あるいはいわゆる「国民総背番号制」批判などへとつながる問題なのだが、社会学的には「親密さ」の基盤的な条件でもあった³「プライバシー」の質的な変容として捉えることができる。すなわち、外界から「放っておかれる権利」を手に入れることで初めて安心して見せられるようになった、親密な相手の前での「私」という存在が、自己の根拠としての性格を失っていくということだ。

もう少し平易な言い方をするなら、プライベートな場所で見せる、親密な人に見せられる自分の姿とは、いわば「素の自分」、つまり「本当の自分」に近いものであったはずだし、だからこそ私たちは、そういう姿を見せる／見る間柄を「親密である」と呼んできたのだ。代わって登場するのは「素の自分」さえも、どのように、誰に見せるかを選択できることを権利だとみなす考え方である。

このことを端的に表しているのが、プライバシーの権利から派生して、近年、一部で認められるようになってきた「自己情報コントロール権」という考え方だ。自己情報コントロール権とは名前の通り、自分に関わる個人情報①他者による収集の許諾、②他者による利用範囲の告知と制限、③訂正、変更、削除といったことを要求できる権利のことを指す。この権利は、情報化にもなって個人の情報がウェブ上で収集され、企業や自治体などの公的機関によって保存、再利用される機会が増加するのに合わせて論じられるようになってきた。

確かに私たちは、自分の情報がウェブ上でどのように流通し、利用されているかという点について非常に敏感になっているし、できるならそれをコントロールしたいとも思っているだろう。だが、どのようにコントロールしたいのか。一言で言ってしまうえばそれは、「A」ようにしたいということなのだ。

古典的なプライバシーと親密さの関係が、ここでは通用しなくなる。親密な相手であるからこそ恥ずかしいところも含めて自分のすべてを見せられるという感覚は、そうしたものを見せなければ真の親密さには到達できないという考えとBの関係にあった。たとえばそれは、同棲して初めて知ることができる相手の「恥ずかしい」部分までを知り、受け入れられるようにならなければ、その後夫婦になったとしても長続きはしない、という言い方に現れている。

それをギデンズ^(注3)は、「羞恥」の感覚の問題として論じている。恥ずかしいという感覚は、自分の物語を統一したものとして語るときの不安要素となりうる一方で、それを見せられる間柄に対する信頼感をもたらししてくれる。羞恥の感覚を乗り越えていくことは、自分を自分として語るための重要な要素なのだ。

これがウェブの情報を自分でコントロールできるようにするという前提に置き換わるとどうなるか。ウェブ上からは、そのとき自分が理想としている自分を形成するのに不都合な情報は、ことごとく消去されることになる。思春期の頃に開設していたホームページに掲載した文章やイラストはネットスラングで「黒歴史」と呼ばれ、消すことのできない人生の汚点のように扱われることがある。これまでであれば、そうしたのも自分の一部だった、と認めることが、⁴自分

という物語を統一的に語れるようになること、日常的な言葉で表現すれば「大人になること」の第一歩だったわけだが、現代ではむしろ、そうした黒歴史をなかったことにしてしまうことで、人は自己の物語を安定させようとするのである。むしろ、ウェブの情報は必ずしも親密な相手にだけ見られるとは限らないので、自己情報コントロール権に基づいた情報の修正や削除が認められていくことの大事さは疑うべくもない。それでも、「親密な相手には恥ずかしい部分も含めてすべて見られてしまう」という前提が、少なくともウェブ上では通用しないとすると、親密であるということの意味も変わってくる。

要するに、親密であるということは、親密な間柄であれば見せてもいいと自分が判断した情報を開示するということ、つまり親密さが自己の選択の問題になるのである。ここには明らかに考え方の逆転がある。恥ずかしい部分も見られざるをえない環境にいる相手を「親密な関係」と呼んでいたものが、自分が見せることを許可した相手に「親密である」というラベルを貼ろうというわけだ。すなわち、⁵親密な間柄が制度的な役割ではなく、関係論的に理解されるものになるのである。

ここにきて、親密であることと近接していることとの間には、必然的な関係はなくなってしまう。ただしそれは、近接している相手に、親密さを感じるという私たちの感覚を根本的に変えるものではない。おそらく私たちは、引き続き近接している相手にある種の親密さを感じるだろうし、家族や長い時間をともにした友人にこそ「素の自分を見せられる」という感覚を抱き続けるだろう。

それでもその一方で、その人たちが知っている「素の自分」が自分のすべてではないという感覚もまた、強いものになってくる。既に述べた通り私たちの社会は複雑化しているし、ソーシャルメディアにおいても、自己呈示についての気遣いが常に行われている。「親密であること」に近いこと「自分のすべてを知っていること」という三位一体の感覚を維持し続けようとするのは、誰にとっても困難なことなのだ。

（鈴木謙介『ウェブ社会のゆくえ』による）

（注1）ノック：ステイブン・ノック（一九五〇～二〇〇八）。アメリカの社会学者。

（注2）ギデンズ：アンソニー・ギデンズ（一九三八～）。イギリスの社会学者。

問一 傍線部1「そこで得られる関係が、人々のアイデンティティを形作っていた」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 近い距離で一緒に生きている相手の愛情や気遣いが、人々の人格の形成には大きく影響していくのだということ。
- ロ 近くにいる親しい人が、生き方や人間関係について教えてくれることで、人々は自己という存在を獲得していくのだということ。
- ハ 人には、いかに親しい人であっても見せられない部分があり、その部分こそが自分という意識を作り上げているうえで重要になるということ。
- ニ 他の人には見せられないようなところまで見せ合うことが、自分という存在や、親しい人との関係を作りあげる土台ともなっていたということ。

問二 傍線部2「居住実態把握」の問題」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 住民票における情報と、戸籍のうえででの情報とで居住地情報が合致しない場合に、どちらを優先するべきなのかという問題。
- ロ 産業構造の変化や、都市への急激な人口の移動によって、人口が減少して過疎化がすすんだ地域での住民情報が把握しにくくなっている問題。
- ハ かつては戸籍によって住んでいる人々の実態が把握できたが、現在では戸籍とも、住民票とも異なった住所に住んでいる事例が出てきている問題。
- ニ ある場所実際に住んでいる人々の情報を、警察が戸別訪問をすることで把握していくという方法に伴うプライバシー侵害の問題。

問三 傍線部3「プライバシーの質的な変容」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自分の姿を飾らずに人に見せることができるように、自分の本来の姿を探し、自己を確立しようとする人々が出てきたということ。

ロ 家族のような近くで住んでいる親しい人にさえも、自分自身の空間には入ってきて欲しくないという意識が人々の中に生まれてきたこと。

ハ 自分の飾らない本当の姿を見せられるような信頼できる相手を、現代の社会では見いだすのが困難になってしまったということ。

ニ 飾らない自身の姿は、親しい人との関係の中で作られてきたが、そうした関係が失われることで、飾らない自身の姿自体がはつきりしなくなるということ。

問四 空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 見せたい相手を選んで、見せたい自分だけを見せる

ロ 見たい相手を選んで、見せたい自分だけを見せる

ハ 見せたい相手を選んで、見たい自分だけを見る

ニ 見たい相手を選んで、見たい自分だけを見る

問五 空欄 B に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 等価 ロ 反対 ハ 背反 ニ 類似 ホ 裏表

問六 傍線部4「自分という物語」とあるが、そこに生じている変化について、著者はどう説明しているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自分に関する情報を、自分に都合の良い形に編集できることで、自分に対して過大な評価や自信が生まれている。

ロ 自分に不都合な情報をも、自分の一部として受け入れ、それを含めて自己を形作ることを避けるようになっていく。

ハ 自分についての情報を、後から自分で削ったり加えたりすることが普通になり、もはや自身の存在に明確な信頼がおけなくなっている。

ニ 自分についての様々な情報を、自由に組み合わせ、新たに作り出していくことが可能となり、自己表現の可能性が広がっていった。

問七 傍線部5「親密な間柄が制度的な役割ではなく、関係論的に理解されるものになる」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 親密さを、相手に対する羞恥心の有無ではなく、相互に抱く愛情や信頼という感覚をとおしてとらえるということ。

ロ 親密さを、婚姻や家族といった制度の中の関係からではなく、相互に抱く愛情や信頼という感覚をとおしてとらえるということ。

ハ 親密さを、婚姻や家族といった制度の中の関係からではなく、相手に恥ずかしい自分を見せる、見せないという自身の選択によってとらえるということ。

ニ 親密さを、相手に対する羞恥心の有無ではなく、相手とどういう社会的な関係にあるのかを通してとらえるということ。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

わたしたちの日常から「正しい」という概念を排除したら、わたしたちの生活はすぐさま崩壊するだろう。すべての思考・行為は「正しい」という概念のもとにのみ意味をなすからだ。平日の朝目覚めたあとベッドにダラダラとどまらず身体をおこすのは、それが通学または出勤につながる行為として正しい行為だからだ。休日の朝早く目覚めたあとしばらくベッドから身体をおこさないのは、それが疲労回復を促進する行為として正しい行為だから——少なくとも正しい行為だと思っからだ。¹「正しい」と「正しくない」のちがいが意味をなさない世界観を想像することはむずかしい。

わたしたちの概念体系のもっとも奥深い基盤の一部である「正しい」という概念を、できるだけ覚めた目で分析してみようというのが本書のねらいである。その分析が正しい分析であるべきなのはもちろんだ。そうであるよう努力すべきである。正しくない結果を得よう、などという思いで思索する者に思索者の資格はない。「正しい」の概念の分析はそれ自体が正しくあるべきだというこの主張に、ある種の悪循環を感じる読者がいるかもしれないが、それは杞憂である。日本語を使って日本語の使用法について語ることに、教育について教育すること、論理を使って論理学について検討すること、物体一般の本性を調べるにあたって（¹ケン微鏡や望遠鏡や粒子加速器などの）物体を駆使することなどが悪循環を引き起こさないように、「正しい」という概念の分析をするにあたって正しい分析を目指すことは悪循環的ではない。

さて、「正しい」の辞書定義はおよそ次の例に代表される。

- 1 形や向きがまっすぐである
 - a 形が曲がったりゆがんだりしていない
 - b 血筋などの乱れがない
- 2 道理にならなっている。事実に合わせている。

a
- 3 道徳・法律・作法などにならなっている。規範や規準に対して乱れたところがない
- 4 筋道が通っている。筋がはっきりたどれる
- 5 最も目的にならなったりやり方である。一番効果のある方法である
- 6 ゆがんだり乱れたりしていない。恰好かっこうがきちんと整っている

(大辞林)

これらの定義は大きく四つの種類に分けることができるだろう。「事実に合わせている」、「規準や規範にならなっている」、「^b ^c」の四つである。このうち四番目の「^c」は物理的形状についての概念であって他の三つと一線を画し、哲学的ふくみが薄いので本書ではあつかわない。一番目から三番目の定義はどれも言明行為、または推論に関してであり、それが外部からあたえられた何かと適合しているのが正しいということだ、と言っているように思われる。もしそうならば、その何かとは何で、それに適合するとはどういうことかをはっきりさせることが必要である。これはかなりやっかいな仕事であり、かつ同時に得るところも多い。哲学的に重要な諸概念が巻き込まれるので、それらについての明瞭化がせまられるからだ。それに加えて「正しい」ということのもう一つの重要な一面、すなわち、正しくあることはそれ自体で望ましいということ、つまり「正しい」という概念はポジティブな評価的
概念であるということも照らし出すのにも役立つ。

「正しい」と反対の意味の表現はというと、「正しくない」や「まちがっている」がすぐ思い浮かぶ。先の辞書の定義から言えば、「事実に合わせていない」、「規準や規範にならなっている」、「筋道が通っていない」となる。「…ない」という否定辞をつけて反対の意味を表すのは常道だが、「まちがっている」には否定辞はない。にもかかわらず、すでに否定辞をふくむ「まちがっていない」を「正しい」と同義とみなせば、それに否定辞を加えた「まちがっていないのでは

ない」に二重否定の論理的操作を適用した結果が「まちがっている」なので、「正しい」の反対の意味の表現が否定辞を暗にふくむという主張の反例にはならない。

辞書定義は「正しい」という概念の分析の足がかりをあたえてはくれるが、それ以上のことはしないし、するよう意図されてもいない。その足がかりからさらに前進するには、まったく別の方法がある。それが分析哲学の方法である。それについてかんたんに見ることにしよう。

「何々哲学」という表現はいろいろある。「西洋哲学」や「東洋哲学」は哲学がなされた場所や知的・文化的土壌をしめす。「フランス哲学」、「日本哲学」などは同様のより狭い範囲を意味する時間による分け方もしばしばなされる。「中世哲学」、「一七〜一八世紀哲学」など。また場所と時間を合わせ言う表現もある。「古代ギリシャ哲学」がいい例だ。また「政治哲学」、「量子力学の哲学」、「フィクションの哲学」などカバーするトピックを表す表現もある。しかし「分析哲学」はそのいずれでもない。

概念を「分析」する哲学というのがもともとの意味なのだが、二一世紀初頭の現在では、それよりも広くかなりバク然とした方法的態度にもとづいてなされる哲学を意味する。では、その方法的態度とはどのような態度なのか。ひとことのスローガンにすれば、「詩的な言葉づかいとは対極的な言葉づかいをする」哲学の態度だと言えるかもしれない。詩的な言葉づかいは、雰囲気やうみだすとか感情をかきたてるなどの目的には適しているが、分析哲学には適していない。哲学的なトピックを正確に提示し、それについて論理的に引き締まったかたちで語るといのが分析哲学だからである。そのためには「議論」が中心的な役割を果たす。議論を尊重する態度をもっておこなう哲学が分析哲学だと言え、かなり大雑把ではあるにしろ分析哲学の本質をとらえることになるだろう。もう一つスローガンがほしいと言ふのなら、「分析哲学、それは理屈だ」がいいかもしれない。「議論をする」ということは、「理屈を言う」ということにはかならないのであるから。

このように言うと、次のような反論をまねくのは避けられない。「理屈を言う」と周りの人とうまくやっつけていけなくなるので、理屈は言うべきではない」、あるいは「理屈っぽいのは嫌われるので、理屈っぽくはいけない」といった反論である。しかしながら分析哲学をやるときは、わたしたちは、こういった反論を真に受ける必要はない。そのような反論は「わたしの言っていることを聞いてはいけない」と主張するようなものだからだ。自己反駁ぼくごなのである。なぜそのようなのは、その二つの反論をくわしく見ればわかる。一番目の反論は、足りない箇所をおぎない、きちんと整理して定式化すると次のようになる。

- 1 理屈を言う」と周りの人とうまくやっつけていけない。
 - 2 周りの人とうまくやっつけていけないのはよくない。
 - 3 d。
 - 4 理屈は言うべきではない。
- だから、
- 1〜3を理由としてあげて、それにもとづいて4という結論を出している。議論をしているのである。つまり、次のような理屈に訴えているのだ。「もし1〜3がすべて真ならば、4も真でなければならぬ。1〜3は真である。ゆえに、4は真である」。理屈を言う」と主張しているのである。二番目の反論も同様に自己反駁だ。
- 5 理屈っぽいのは嫌われる。
 - 6 嫌われるのはいけない。
 - 7 理屈っぽいのはいけない。

一番目よりも短い、これもあきらかに議論である。「もし5と6がともに真ならば、7も真でなければならぬ。5と6はともに真である。ゆえに、7は真である」。この理屈なしでは二番目の反論は成り立たない。

甲

自己欺瞞まぼろし的とさえ言ってもいいかもしれない。

「理屈っぽいのは日本人の本性に反する」というようなことを真面目に主張する日本人がいるかもしれない。もしいるならそういう日本人は、もし理屈っぽさが日本人の本性に反するならば人間であるということが日本人の本性に反することになるのだ、ということはこの二つの例が示していることに気づくべきである。なぜなら、理屈に反対する人でも理屈に関して否定的な主張をするときに理屈を回避することはできない、ということはこの二つの例は示しているからである。人間であるかぎり理屈を避けて通ることはできない。人間であるということは理屈っぽいということなのである。理屈嫌いは人間嫌いであり、理屈嫌いな人間は人間嫌いな人間、すなわち自己嫌悪の存在にほかならない。分析哲学者の態度は、そのような自己嫌悪者の態度とは正反対の態度である。理屈から逃れられない自分をありのままに認識して、理屈の利点に注目し、それを最大限に發揮すべく駆使しようとするのが、分析哲学者の態度なのである。

(八木沢敬『「正しい」を分析する』による)

問八 傍線部1『「正しい」と「正しくない」のちがいが意味をなさない世界観を想像することはむずかしい」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人間は「正しい」行為や生活を無意識のうちに行っており、現実生活において「正しくない」行為は想像の中でしか成り立たないから。

ロ 「正しい」と「正しくない」の意味の違いは、現実生活では明確であるため、両者の違いが意味をなさない世界を具体的にイメージすることは困難だから。

ハ 「正しい」か否かは人間生活の基盤と結びついた概念であり、両者の違いが意味をなさなくなれば、人間の生活そのものが成り立たないから。

ニ 生活の基盤と結びついた「正しい」行為は人間の本能のようなものであり、「正しくない」行為や生活が正当性を持つ世界は誰も望まないから。

問九 傍線部 i ii のカタカナの部分と同じ漢字を含むものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

i ケン微鏡

イ ケン在化 ロ ケン査 ハ 穂ケン派 ニ 剛ケン

ii バク然

イ バク芽 ロ 束バク ハ バク発 ニ 砂バク

問十 空欄

a

〜

c

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ a ゆがみや乱れがない b 筋道が通っている c 正確である

ロ a 筋道が通っている b 正確である c ゆがみや乱れがない

ハ a 正確である b 筋道が通っている c ゆがみや乱れがない

ニ a 正確である b ゆがみや乱れがない c 筋道が通っている

ホ a 筋道が通っている b ゆがみや乱れがない c 正確である

ヘ a ゆがみや乱れがない b 正確である c 筋道が通っている

問十一 傍線部2『「正しい」の反対の意味の表現が否定辞を暗にふくむという主張の反例にはならない』とあるが、

この理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 「まちがっている」の意味が、実は否定辞を含むものと同じ論理構造をもつため。

ロ 「まちがっている」の意味が、実は否定辞を含まないものと同じ論理構造をもつため。

ハ 「まちがっている」は否定辞を含まないが、「正しい」の類義表現として成り立つから。

ニ 「まちがっている」は否定辞を含まないため、「正しい」の対義表現として成り立たないから。

問十二 傍線部3「議論を尊重する態度」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人間の理屈は明晰な思考を駆使するためであり、嫌われても理屈っぽさは甘んじて受け入れようとする態度。
- ロ 理屈から逃れられない自分を認識して理屈の利点に注目し、その効果を最大限に主張していこうとする態度。
- ハ 理屈を否定するのではなく、理屈の良さを認めて物事を考え、同時に他者の人間性を認めようとする態度。
- ニ 人間は理屈からは逃れられないことを認め、理屈の利点を発揮させて、物事を深く考えようとする態度。

問十三 空欄

d

に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 嫌われることをすべきではない
- ロ 理屈を言うのはよくないことだ
- ハ 周りの人とはうまくやるべきだ
- ニ よくないことはすべきではない

問十四 空欄

甲

には次の四つの文が入る。正しい順序に並べ替えたとき、四番目にくる文はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ これが自己論駁でないならば何なのか。
- ロ いけないと自分が主張していることをすることによって、それがいけないことだという自分の主張を確立しようとしているわけだ。
- ハ 少なくとも不誠実であることはたしかである。
- ニ 「理屈っぽいのはいけない」という主張を、理屈によって支持しようとしているのである。

問十五

この文章の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「議論をする」ことは「理屈を言う」と同義であり、それに対する反論は自己反駁的にならざるを得ない。
- ロ 「正しい」という概念を正しく分析することは可能だが、理屈によって「正しく」定義することはできない。
- ハ 「正しい」という概念の明瞭化によって、それ自体が積極的評価を意味する概念であることがわかってくる。
- ニ 分析哲学的方法的態度によって、「正しい」の辞書定義をより細密に前進させる本質規定が可能になる。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

これも今は昔、唐に柳下恵りゅうかけといふ人ありき。世のかしこき者にして、人に重くせらる。その弟に盗跖たうせきといふ者あり。一つの山の懐に住みて、もろもろの悪しき者を招き集めて、おのが伴侶として、人の物をば我が物とす。歩く時は、この悪しき者どもを具する事、一三千人なり。道にあふ人を滅ぼし、恥を見せ、よからぬ事の限りを好みて過すに、柳下恵、道を行く時に孔子にあひぬ。「いづくへおはするぞ。みづから対面して聞えんと思ふ事のあるに、かしこくあひ給へり」といふ。柳下恵、「いかなる事ぞ」と問ふ。「教訓し聞えんと思ふ事は、その舎弟、もろもろの悪しき事の限りを好みて、多くの人を歎かする、など制し給はぬぞ」。柳下恵答へて曰く、「おのれが申さん事を敢へて用ふべきにあらす。されば歎きながら年月を経るなり」といふ。孔子の曰く、「そこ教へ給はずは、我行きて教へん。いかがあるべき」。柳下恵曰く、「さらにおはすべからず。いみじき言葉を尽して教へ給ふとも、なびくべき者にあらず。返つて悪しき事出で来なん。あるべき事にあらず」。孔子曰く、「悪しけれど、人の身を得たる者は、おのづからよき事をいふにつく事もあるなり。それに、『悪しかりなん。よも』**A**』といふ事は僻事ひがてなり。よし見給へ。教へて見せ申さん」と言葉を放ちて、盗跖がもとへおはしぬ。

(中略)

盗跖が曰く、「汝来たれる故はいかにぞ。たしかに申せ」と、怒れる声の、高く恐ろしげなるをもていふ。孔子思ひ給ふ、かねても聞きし事なれど、かくばかり恐ろしき者とは思はざりき。かたち、有様、声まで人とは覚えす。肝心も碎けて震はるれど、思ひ念じて曰く、「人の世にある様は、道理をもて身の飾りとし、心の掟とするものなり。天をいただき、地を踏みて、四方を固めとし、おほやけを敬ひ奉る。下を哀れみて人に情をいたすを事とするものなり。しかるに承れば、心のほしきままに悪しき事をのみ事とするは、当時は心になふやうなれども、終り悪しきものなり。さればなほ人はよきに随ふをよしとす。しかれば申すに随ひていますかるべきなり。その事申さんと思ひて参りつるなり」といふ時に、盗跖、雷のやうなる声をして笑ひて曰く、「汝がいふ事ども一つも当らず。その故は、昔、堯、舜と申す二人の帝、世に貴まれ給ひき。しかれども、その子孫、世に針さすばかりの所を知らず。また世にかしこき人は伯夷、叔斉しゆせいなり。首陽山に伏せり、飢え死にき。またその弟子に顔回がんわいといふ者ありき。かしこく教へ給ひしかども、不幸にして命短し。また同じき弟子にて子路しろうといふ者ありき。衛の門にして殺されき。しかあれば、かしこき輩は遂にかしこき事もなし。我また悪しき事を好めども、災身に來たらず。ほめらるるもの、四五日に過ぎず。そしらるるもの、また四五日に過ぎず。悪しき事もよき事も、長くほめられ、長くそしられず。しかれば我が好みに随ひ振舞ふべきなり。汝また木を折りて冠にし、皮をもちて衣とし、世を恐り、おほやけにおち奉るも、二たび魯に移され、跡を衛に削らる。などかしこからぬ。汝がいふ所、まことに愚かなり。すみやかに走り**B**。一つも用ゆべからず」といふ時に、孔子またいふべき事覚えずして、座を立ちて急ぎ出でて、馬に乗り給ふに、よく臆しけるにや、轡くわを二たび取りはづし、銜あぶみをしきりに踏みはづす。これを世の人、「孔子倒れす」といふなり。

(『宇治拾遺物語』による)

問十六 傍線部1「悪しかりなん」は単語がいくつ組み合わせられているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 二つ ロ 三つ ハ 四つ ニ 五つ

問十七 空欄 **A** **B** に入る語句として、それぞれ最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|-------|
| A | イ 聞かず | ロ 聞かなむ | ハ 聞かじ | ニ 聞くべし | ホ 聞かん |
| B | イ 帰らばや | ロ 帰らず | ハ 帰りけり | ニ 帰れり | ホ 帰りぬ |

問十八 傍線部2「奉る」、3「承れ」、4「いますかる」は、それぞれ誰に対する敬意を表しているか。それぞれ最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ(同じ選択肢を繰り返し使っても良い)。

- イ 柳下恵 ロ 盗跖 ハ 孔子 ニ おほやけ

問十九 傍線部5「世に針さすばかりの所を知らず」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ わずかな教養も持っていない。
- ロ わずかな尊敬も集めていない。
- ハ わずかな土地も所有していない。
- ニ わずかな子孫も生存していない。

問二十 傍線部6「孔子倒れず」とほぼ同じ意味の慣用句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 瓢箪から駒ひょうたん
- ロ 河童の川流れ
- ハ 虎の威を借る狐
- ニ 木を見て森を見ず

問二十一 本文の内容と合致するものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 孔子は盗跖の存在が柳下恵の将来の出世の障りとなると思っていた。
- ロ 孔子はおのずから人は良いことに耳を傾けるものであると考えていた。
- ハ 柳下恵は弟盗跖の非道ぶりを恥じていて、孔子に会わせたくなかった。
- ニ 盗跖に言わせれば、かしい人ほど世間の人々から嫌われがちである。
- ホ 盗跖に言わせれば、人の評判は変わりやすく、善悪は自分で決めるものだ。

問二十二 右の本文は『莊子』雜篇「盗跖」を踏まえて書かれている。以下の文章は前半の柳下恵（『莊子』では柳下季）と孔子の会話から、柳下恵のことばの一部を抜き出したものである。以下の問いに答えよ。なお、返り点、送り仮名を省略した箇所がある。

柳下季曰、「先生言、『為人父者、必能詔其子、為人兄者、必能教其弟。』若子不聽父之詔、弟不受兄之教、雖今先生之弁、将奈之何哉。且跖之為人、也、心如湧泉、意如飄風。強足以拒敵、弁足以飾非。順其心、則喜、逆其心、則怒。易□人以言。先生必無往。」

(注) 跖…盗跖のこと。

(1) 傍線部1「若子不聽父之詔、弟不受兄之教」をすべてひらがなで訓読した場合、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ わかきこのちちのつげをきかず、おとうとあにのおしへをうけざるは
- ロ こちちのつげをきかざるがごとく、おとうとあにのおしへをうけず
- ハ こちちのつげをきかず、おとうとあにのおしへをうけざるがごとく
- ニ もしこちちのつげをきかず、おとうとあにのおしへをうけずんば

(2) 傍線部2「将奈之何哉」は「はたこれをいかんせんや」と訓読するが、これが意味するものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 少しも役に立たない。
- ロ 今後の未来に期待したい。
- ハ いったい何を述べているのか。
- ニ これほどすばらしいものはない。

(3) 傍線部3「其」が指すものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 柳下季
- ロ 先生
- ハ 踊
- ニ 父

(4) 空欄に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 辱
- ロ 詔
- ハ 有
- ニ 教

〔以下余白〕